

雜 錄

● クロシビの稚魚に寄生する

「ペンネラ」

昨年の九月二十五日、房州産といふシビの子供を二尾得た。件のシビは、體長(尾鰭を除く)、一方(A)が二〇・三糎、他(B)が二一糎で、其の胸背臀鰭の形狀、側線の曲り工合などから見て、恐らくクロシビ (*Thynnus orichthys*) の稚魚であらうと思ふ (『水産學會報』第一卷第一號所載「岸上博士『サバ・サハラ・シビ類の研究』」参照)。

さて、上記のシビの腹面には、各一個づつの「ペンネラ」が寄生して居た。Aでは、「ペンネラ」は、右方の腹鰭の基部から少し(約五糎)後方に隔つた處(註一)に體を挿入し、頭端は、魚の腹壁を破つて腹腔に達し、更に其の部分に在る宿主の肝臓の一部をも貫いて其の背側に及んで居た。又Bでは、寄生蟲は肛門から約二・三糎前方、體の腹部正中線から約八糎右方に隔つた處に附着し、其頭部は、同じく腹壁を破つて腹腔内に達して居た。

(註一) 此部は、勿論、宿主が腹鰭を疊む場合には其の下に隠れる。

腹腔内に侵入して居る寄生蟲の部分には、宿主の組織から出來た囊が被つて居るから、腹腔を切開した丈では直接に寄生蟲の體を認めることは出來ぬ。殊に寄生蟲の

頭を包む部分は其の囊の壁が著しく厚いから、其部は球狀に膨れて、恰も、可なり大なる一種の腫瘍が其處に出來て居るやうに見える。此の球狀部は、A・B双方の場合に於て、共に、直徑約七糎を算した。球狀部を切開して見ると、其中には寄生蟲の頭部があるが、併しながら、其の頭部と囊の内面とは密接に接着して居るのではなくて、兩者の間に多少の間隙がある。而して此の間隙には、恰も血液の凝固したやうな黒褐色の物質が多少蓄積し、又、寄生蟲の所謂疣狀突起のある部分にも、同様の物質が附着して居た(註二)それから又、厚い壁を持つて居る球狀部の構造を見ると、肉眼的にも、夫より後方の、寄生蟲の頸部及角狀突起を包む部分の、簡単な膜狀觀を呈するに反し、此部は多少肉質であつて、或は何等か特殊の組織構造を示すものではないかと思はれるやうになつて居る。此處で、宿主の方の立場から、少し主觀的の考察を試みると、「ペンネラ」といふ半面の識もない不思議な亂暴者が、突然横腹へ孔を穿けて闖入して來たのに對し、自ら之を撃退する能力もなく、さればとて其の自由な跳梁に任せて置けば、結局我身の破滅となる外はないから、已むを得ず、之を、ある一定の局處内に封鎖し、更に之に幾分の食扶持をも與へて、片務的な妥協生活を營んで居るといふやうなものである。

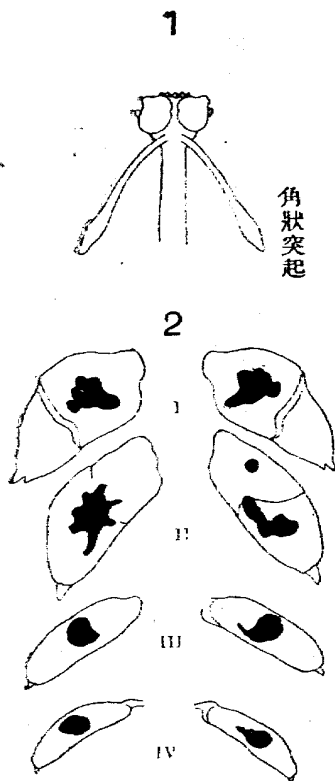
(註二) 他の部分には之等の現象は認められない。

昨年 D. KEELIN 及 W.-R. THOMPSON ("Sur le

(雜 錄) オッコロシビの稚魚に寄生する「ペンネラ」

cycle évolutif des Dryinidae, Hyménoptères parasites des Hémiptères Homoptères," "Compt. rend. Soc. Biol.," tom. LXXVIII, No. 5, 1915.) は、膜翅類中の Dryinidae の幼蟲が、有吻類中の同翅類の體內に寄生する場合、寄生蟲の周圍には、宿主の皮下細胞の増殖に因つて一種の胞囊が生じ、而してその胞囊は、恰も彼の蟲癭の營養層若くは哺乳類の胎盤のやうに、其中に存在する寄生蟲に營養の媒介をするものである事を認め、次に又斯様な寄生状態は、全く Dryinidae の者に特殊なものであるといふ處から、之に胎盤性若くは蟲癭性寄生 ("parasitisme placentaire ou gallicole") といふ名稱を附けるといふ事を述べたが、自分は前述した「ペンネラ」の球狀囊も或は類似の働をするものではないかと思ふ。

「ペンネラ」に貫通されて居る宿主腹壁の部分は管状をなし、其内面は滑かである。それから又、「ペンネラ」の頸部と此の管の内面とは密着することなく、若し寄生蟲第一圖。頭部背面圖。×4/3 第二圖。頸部前端下面にある退化したる四對の附屬肢。約五十五倍。



に運動の能力があるならば、多少は動き得るやうになつて居る。

次にシビの「ペンネラ」は、自分が曾て本誌で報告したことのあるマンボウの「ペンネラ」とは、著しく形態の相違するもので、寧ろ *Lophius marmoratus*, *Diodon pilosus* などに寄生するといふ *Pennella sagitta* の方に近似して居る。即ち、シビの「ペンネラ」では、頭部の後端にある角狀突起が左右の二本丈で、中央の者が缺けて居る。而も、その存在して居る二本の突起は、マンボウ寄生の者に比して著しく長く且つ細い(圖第一)。それから、頭部の下面にあり、Warzen, tubercles などと呼ぶる、疣狀突起は、マンボウの者よりシビの者の方が数が少なくて形が大きく、且つそれは前者でこそ疣狀の觀を呈するが、後者では寧ろ樹枝狀であつて、之を疣狀突起と呼ぶよりは樹枝狀突起と稱する方が一層適切である位である。尙ほ、後者には、前記中央の樹枝狀突起部を取巻いて、其の周圍に左右各々三個づゝの、稍大きな、而して簡單な、之こそ疣狀突起と稱して差支ないやうな突起が並んで居るが、前者には、全く其の様な物が認められぬ。更に又、シビ寄生の者では、頸部前端の腹面正中線に、退化した附屬肢の痕跡と言はれる微細な四對の突起があるが(圖第二)、マンボウ寄生の者では、其中の最前の一對、或は全體の突起の中の一―二個(對にあらず)が、簡單な針狀突起として残る許り、他は殆んど消滅して居る。此他尙ほ、一

般體形の著しく小なる點、體に環節狀構造を認めざる點、及、後胴部に着生する絲狀突起の比較的長くして其の分岐法の簡單なる點などでも、前者即ちシビの者は、明かに後者と異つて居る。

本蟲の測定表は左の如くである。但し、標本は二個あるが其中の一個には卵絲が缺けて居るから、茲には、他の一個の、完全な者の測定表のみを掲げる。併し、兩者共、其大さは略ぼ同一である。

全體長(卵糸を除く。但し糸狀突起は測る)……………六〇耗

頭長(角狀突起の基部迄測る)……………三五耗

頭幅……………五耗

角狀突起の長さ……………一・五耗

同上太さ(中央部の直徑)……………〇・五耗

角狀突起の基部より後胴部の前端迄の長さ(本種にては頸部と

夫以後の部分との境餘り明ならず)……………四二耗

同上前半(頸部に當る部分)の太さ……………一・八耗

同上後半の太さ……………二・五耗

後胴部の長さ……………一〇耗

卵糸の長さ……………六〇耗

同上太さ……………〇・三九耗

宿主の體外に現はれ居たる部分の長さ(卵糸を除く)……………約三六耗

色は、頭部及卵絲共に麥藁色で卵絲は殊に黄味が勝つて居る。角狀突起は大體頭部と同色であるが、其先端は稍汚褐色を帯び、夫れ以後の總ての部分は絲狀突起も共に多少紫がられる灰黒色を呈して居る。(フアルマリン標本)。

本蟲は、大體 *v. NOEDMANN* の圖説した *Pemella sagitta* LIN. に類似して居るが、併しながらは兩者の間には多少の相違がある。今その相違の主なる二―三の點を列擧すると下のやうである。

(一) *P. sagitta*. 樹枝狀突起が多く、頭部の下面は全く之が爲に被はれて居る。

本蟲。樹枝狀突起が割合に少く、而して、夫等は頭部下面の中央に集合し、其の周圍に更に六個の大形な疣狀突起が認められる。

(二) *P. sagitta*. 角狀突起は基部が最も太く、先端に向て次第に細くなつて居る。

本蟲。恰も其の反對で、先端はやゝ著しく膨れ、全體として少しく細長い棍棒狀を呈して居る。

(三) *P. sagitta*. 頸部先端の腹面に在る四對の附屬の痕跡は皆同大。

本蟲。前方の二對は略同大であるが、第三對は少しく小さく、最後の一對は更に著しく小さい。即ち第一對の大きさ―長さ〇・二八四耗、幅〇・一四二耗。第四對の大きさ―長さ〇・一七八耗、幅〇・〇五三耗。(第二圖參照)

(四) *P. sagitta*. 後胴部の絲狀突起十六對。基部に近く屈曲點あり、僅數の者のみが又狀に分岐して居る。

本蟲。絲狀突起二十對。基部に屈曲點無く、但し、屢屢、所々に、恰も菌類でも寄生したやうに、多少腫脹した部分はある)、且つ、大部分の者は、二又、三又、若く

(雜 錄) ○橋杭を食ふ等脚類 ○臺灣産「ペリカン」の一種

は四又し、分岐せざる者は僅かに二・三に過ぎぬ。

本蟲が新種であるや否やを決定するには、今少し多數の標本検査と文献の調査とをせねばならぬ。(石井重美)

●橋杭を食ふ等脚類

橋杭等の木材に穿孔する等脚類として有名なるは *Limoria* なるが、これとは全く異なる等脚類にして、習性は相似たるものを市村塘氏が郵送せられたるを検したるに *Sphaeroma retrolaevis* RICHARDSON の記載と挿圖とによく符合し、該標本は此種に屬すと斷定して差支なきを確め得たり。リチャードソンの標本はジョルダン及スナイダーの採集せる長崎産のものなるが、市村氏は加賀大野川橋杭及同國粟ヶ崎橋杭に於て得られたり。原記載との最も著しき差異は、市村氏の標本にては尾脚の内枝も稍可動的なる事にして、同枝の不可動的なる事は「スフェーロマ」屬のみならず「スフェーロマ」科の特徴となしあるに想到せば、其差異の極めて重大なるが如き感を抱かしめずんばならず。然れども、リチャードソンの本種の記載が殆ど表面的に止り、深く附屬肢の如何を説かざるを以て見れば、こゝに述べたる内枝の可動も同女史の注意を洩れたるなるべしと推測して可なるが如く思はる。又、産地によりて多少の變異あるは免れ難き所なれば、上述の差異の如きも之を許容し得る範圍内にありとも云ふべし。勿論最後の斷案は原記載に省かれたる其他の附

屬肢の状態を模式標本に就て檢したる上の事に屬せり。

リチャードソンの本種の記載には木材を食ふといふ習性の記述を缺く。「スフェーロマ」屬に屬するものにして、橋杭を穿孔するを以て有名なるものに *S. destructor* RICHARDSON あり。此種はセント・ジョーンズ川の橋杭を蜂巢狀に穿孔す。橋杭の末端を見れば年輪と平行して同心輪をなして穿孔排列し、該等脚類が軟材を好むを示すとぞ。此種と同様に本種にても強大なる大顎が上唇上に著しく突出し、如何に破壊作用に適せるかを思はしむ。標本と同壇内にある小木片を見るに、米國種の場合と同じく、食害が主として木理に平行して進み、此に垂直なる場合は多からざるを認む。本種は第四高等學校にて生徒の實驗材料に供する由なれば、今後數多の面白き觀察遂げらるゝ事なるべし。(寺尾 新)

●臺灣産「ペリカン」の一種

臺南廳の博物館には數年前に採集せられたる同島産「ペリカン」の一種を陳列せり。されど不幸にして未だ學界に報告せられざりき。然るに去夏飯塚が同島視察に赴きし際此標本あるを知り、寫真其他の記載を添へ送られ度き旨を依頼し置きたり。其後臺南廳殖産係なる中山勝氏より依頼のもの全部到着したるにより、之を黒田に示しその種名鑑定をなさしめたり。其結果によれば殆んど疑ひなき *Pelecanus crispus* BRUCH. の成鳥なることを知